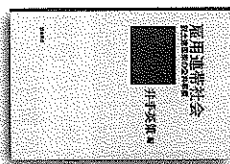


士建国家からの脱却と復興における公共事業のあり方を問う



井手英策 編

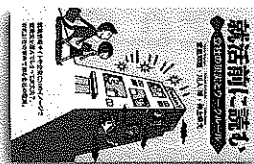
『雇用連帯社会―脱 士建国家の公共事業』

岩波書店

2011年9月発行

これまでの「士建型福祉国家」日本における公共事業のあり方を問う、震災後に自治体が行ったべき役割を提言している。公的部門の財政投下による雇用創出には、中間層を含む幅広い社会層から税への同意を取り付ける必要がある。そのためにはこれまで雇用を生み出してきた「公共事業」を「公共の任

誰もが知っておきたい この国でおきている過労死・労働問題の現実を弁護士が語る



就活前に読む 会社とワーキング・スモール

宮里邦雄・川人博 著

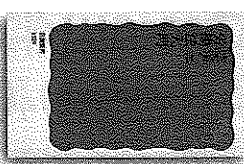
『就活前に読む 会社とワーキング・スモール』

旬報社

2011年9月発行

本書の特徴は、何と書こうでも第一部「会社で何が起ころているか」にある。文系・理系それぞれの職種ごとに、具体的な企業名を挙げながら過労死や過労自殺の実例を紹介している。これは、百戦錬磨の労働弁護士3名という強力な執筆陣でなければ不可能だったろう。誰もが知っているような

個人・国家・そして集団 欧米との比較から労働法を論じる



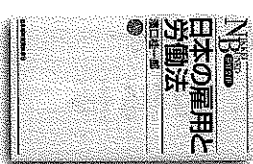
水町勇一郎 著 『労働法入門』

岩波新書

2011年9月発行

雇用関係のさまざまな場面に於いて、基本的な労働法の知識を体系的にまとめられている。欧米の労働法との比較を通して、その背景や基礎となる社会のあり方とともに、日本の労働法の特徴を明らかにしている。なかでも、今日の労働法の方向性をめぐる「個人」が「国家」かの議論に言及している点が興味深い。「個

日本の雇用システムと労働法制の重要論点を完結に整理した必読書



濱口桂一郎 著 『日本の雇用と労働法』

日経文庫

2011年9月発行

濱口氏の最新刊である本書は、労働問題を社会科学の観点と法学的観点という両者から分析している点が大きな特徴である。日本型雇用システムと日本の労働法制について、両者の関係を日本型雇用・雇用管理・報酬管理・労使関係・日本型雇用システムとの周辺と外部という領域ごとに解説し、最後に日本型雇

務、すなわち社会的に必要な事業として再生させるべきである。以上が本書の各論文に共通する問題意識だ。特に社会的必要から財政を考えるべきであるとの主張はシンガポールが、近年の支出の削減ばかりを考える財政論への必要な批判だといえる。雇用創出への財政的同意という政策上のテーマに迫る一冊である。

大企業に就職した人が命を落としているという事実が、労働問題に関心のある人はもろろん、就活生こそ知っておいてほしい。

第二部「就活前に知っておきたいワーキング・スモール」はやや専門的な内容だが、Q15の「残業代及み初任給」の語は特に、就活生にはおさええておいてほしい情報だ。

人としての労働者」を想定し、それをサポートするシステムとして捉えろか、それとも従属的な地位に置かれる労働者に対して「国家」による法規制が重要と考えるのか。

本書では、これらの中間に「集団」が位置づけられ、制度的な基礎として機能することが労働法の課題になると主張されている。

用システムの今後についても言及している。特に日本型雇用システムの本質は「職務のためのインセンティブ契約」という指摘は、日本の労働者への広範な指揮命令権の問題を考える上で重要である。

体系的に知識を整理できる良書であり、熟読することを薦めたい。

『ラック企業』論の決定版 相駁から見えてきた「負けない」戦略とは



今野清貴・川村遼平 著 『ラック企業に負けない』

旬報社

2011年9月発行

『ラック企業本』の決定版。POSSEに寄せられる相駁をもとにラック企業の違法行為の手法を整理し、対処法を解説する。現代日本におけるラック企業化の背景は、①非正規雇用の多様化によって、労働市場が「蓄わりはいくらでもいる」状況に変化したこと、②際限ない業務命令の見返りとして必ずしも

3.11後の生活再建に向け、必要なのは福祉国家型の対抗構想



福祉国家と基本法研究 宮里邦雄・川人博 著

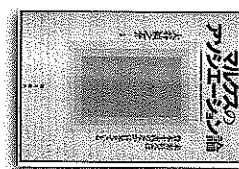
『新たな福祉国家を展望する―社会保障基本法・社会保障意識の提言』

旬報社

2011年9月発行

3.11後、歴史的な危機の局面を迎える日本。本書が提起する「社会保障意識・基本法」は、社会保障に関わる立法・社会保障行政・司法の判断などの諸領域において、私たちが参照すべき指針を示している。大災害からの救済と生活再建を速やかに行うためには、福祉国家型施策の本格的展開が緊急に必要である。長期の経済的停滞に陥りできた被災地＝地方が本格的な復興を遂げ、人々がその地で暮らし続けることがなによりも求められている。

資本主義の「胎内」にアンソニー・ジョンの契機を探る



大谷禎之介 著 『マルクスのアンソニー・ジョン論』

岩波書店

2011年9月発行

『未来社会は資本主義の胎内に見えている』、マルクス経済学の大家である著者が、マルクスの「アンソニー・ジョン」に関する記述を授業かつ体系的に引用すること、その理論的根拠を明らかにした専門書である。マルクスの「アンソニー・ジョン」論は、未来社会への「空想」でも、漸進的な

被災地を襲う冷徹な新自由主義 世界各国で強行された被災後の政策とは



ナオミ・クライン 著 『ショック・ドクトリン (上・下)』

岩波書店

2011年9月発行

米国のジャーナリストであり活動家、ナオミ・クラインの2007年の著書が、ついには邦訳された。民主主義が停止するテロや災害などの危機に乗じてこそ、新自由主義のピシヨンは全面展開される。その冷徹な事実を、世界中の膨大な事例でたのみかかのように論じてきたのは圧巻である。どの国の事例も裏切ったが、震災

雇用が保障されなくなっていることにある。こうした分析から見えてくる戦略は、指揮命令の制限と失業保障を重視する労働市場政策、そしてユニオンやNPOによる労働者の権利獲得だ。ラック企業に對抗することは、市民社会の規範を塗り替えることである。すべからず実践的の一冊だ。

震災や原発事故を構造改革の好機とする勢力が台頭するなかで、その対抗軸を明確に、そしてラディカルに示した意義深い一冊だ。

後の日本で特に注目すべきは、05年のハブケーン・カトゥーナーの批判だ。行政サービスへの規制する公約法が停止されたこと、緊急事態管理庁の業務民営化によって被災者の支援が機能しなかったことなど、事例は尽きない。被災者支援プログラムには一語をお勧めしたい。